



年 組 名前

# 道新でワークシート

## 比布イチゴ 復興へ挑戦

### 町や農協などプロジェクトチーム

【比布】イチゴ農家が減少の一途をたどる比布町で、「イチゴのマチ」を復活させようと、町や町農協などがプロジェクトチームを立ち上げ、イチゴ復興に向けた取り組みを始めた。冬期間の栽培

### 無暖房ハウス導入へ 通年出荷目指す

（相沢宏）  
 培にも挑戦し、通年出荷を目指す計画で、町は「加工品作りなど、経済活性化にもつながる」と力を入れる。

比布のイチゴは、大正時代に農家が自家用に育てたのがルーツ。その後、生産が拡大され、マチの特産品の一つとなった。数十年前に定めた町のキャッチフレーズは「スキー」といこのマチ」。町のマスケットもイチゴをデザインした「スノーベリー」などイチゴを核にしたマチづくりを行い、イチゴでつくったお酒や、ゼリーなどの菓子類も生産されたこともあった。

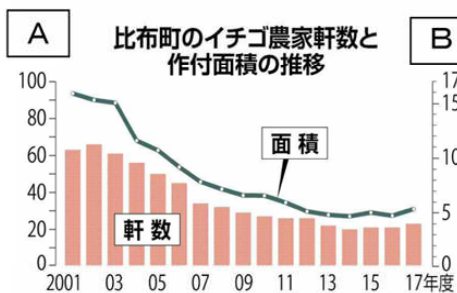
しかし、高齢化による農家の減少に加え、稲作との兼業には田植えとイチゴの収穫時期が重なることから、イチゴ栽培をやめる農家が増えた。町産業振興課によると、記録の残る2001年度は63軒が計15畧を栽培していたが、17年度は23軒が計5畧と3分の1まで減少。01年度に7800万円だった町農協のイチゴ販売額も17年度は2800万円に落ち込んだ。

ただ、「比布はイチゴ」のイメージは町外では根強い。町内にイチゴ狩りに訪れた人数は、01年度は農家17軒で約1万1千人。17年度は9軒と農家数が半減したにもかかわらず9600人を維持しており、町は「イチゴのニーズはある」と判断した。

プロジェクトチームは町と町農協、イチゴ栽培農家、上川農業改良普及センターの担当者らが2月末に発足した。道内産の流通が少なく、クリスマス需要などで価格が上がる冬期間の出荷を模索する。年度内にも道立総合研究機構上川農試が開発した、ビニールを4重に重ね保温性を高めた無暖房ハウスを導入して試験栽培を始め、早ければ19年度からの通年出荷を目指す。

併せて、人気のある本州産の「紅ほっぺ」など新品種の可能性も探り、栽培コストの試算、販路拡大の計画も立てる予定だ。

村中一徳町長は「イチゴ栽培で魅力あるまちの農業をつくり、農家の所得向上、新規就農者の増加にもつながりたい。ぜひ成功させたい」と意気込みを語る。



比布に広がるイチゴ畑。イチゴ再興に向け、プロジェクトチームでの成果に期待が集まる。昨年6月、比布町提供

2018年4月18日朝刊旭川・上川版（記事は再編集しています）

①記事の左上にあるグラフの **A** **B** に入る単位を記事から探して書きなさい。

A

B

②リード文に「イチゴ農家が減少の一途をたどる」とありますが、その原因はどんなことですか。二つ書きなさい。